

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2002年2月号



保育者、児童館職員、親などに待望の書

最新刊

手づくり アンパンマンがいっぱい 4

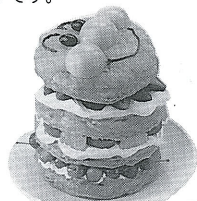
ランチとおやつ

- *保育者やお母さん方の感性を活かして、楽しんでつくれ、子どもにも喜ばれるものばかりです。
- *子どもたちに喜ばれるメニューや、子どもが大人と一緒に作れるメニューなど、バラエティー豊富なレシピが紹介されています。
- *作品をカラーで紹介し、作り方は、イラスト入りで、見やすく読みやすいが画面構成。
- *見ても楽しいレシピブック。



*アンパンマンの仲間たちにはおいしいキャラがいっぱい。アンパンマンはもちろんのこと、しょくぼんまん、カレーパンマン、ジャムおじさん、パタコさん、めいけんチーズなどなど、おなじみのキャラたちがおいしいランチの中に登場してきます。園で、家庭で、さあみんなで作っていただきましょう。

*身体にやさしく、おいしいお菓子作りでは定評のある大森いく子先生のアイデアあふれるおやつとランチのメニューです。旬の材料で手軽に作れて毎日のランチを楽しむヒントがいっぱいです。



☆大森いく子。創作菓子研究家。

「からだにやさしく、負担をかけないお菓子」を基本テーマに毎日の生活を豊かにしてくれるレシピを創作、提案しています。アンパンマンの仲間たちの表情を、おいしいお菓子とランチメニューにして、紹介してくれました。

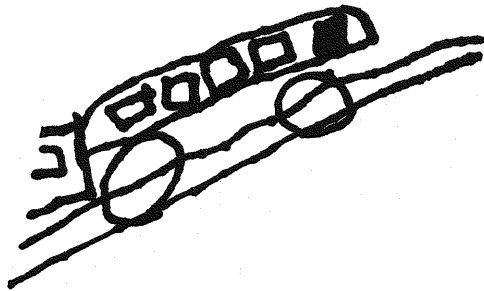
大森いく子／著

A B判 96頁 定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第101巻 第2号

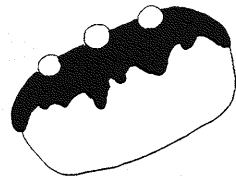
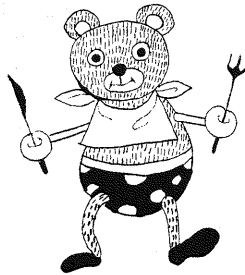


幼児の教育 目次

— 第一〇一巻 第二号 —

© 2002
日本幼稚園協会

- 悩める時代の母親たちを支援するとは 田代 和美 (4)
- いま、子どもたちは 児童虐待の実像とその防止への支援 落合美貴子 (10)
- 恐さを遊び化する子どもたち 永田 陽子 (16)
- 子どもの自己コントロールの育ち—日本保育学会第五十四回大会
シンポジウムから— 井上 真奈・矢田美樹子 (21)
- メディア文化黙示録—二つの結末 山本 政人 (26)



ある日……………(32)

特集へ伝える

声で伝えること……………藤井チズ子…(34)

伝えたい思い、伝わる思い、感じる心……………渡辺 満美…(38)

こころとあたまの人間学から……………吉増 克實…(42)

存在あることの嬉しさを伝える―言葉の世界から―……………佐塚 公代…(46)

幼稚園誕生の時代―関信三の葛藤―(十二)関信三の長い旅……………国吉 栄…(51)

耳をすまして 目をこらして(22)……………宮里 暁美…(62)

表紙絵／佐々木麻こ

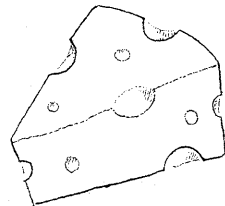
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット／彌永たたえ

編集委員／田代 和美・榎田 正子・高橋 陽子

編集部／仲 明子





悩める時代の 母親たちを支援するとは

田代 和美

この数年、「子育て支援」に関する活動が盛んに行われている。そのためにこのところ、私も小さな子どもを持つ母親たちに向けて、ないしは母親たちと一緒に話をする機会が増えた。

P T A 活動や園での行事に熱心に取り組み、また子どもの友達の母親とも一生懸命にかかわり、よその子どもたちをしょっちゅう預かり……、そして疲れ果てて自分の子どもに当たってしまうと悩む母親がいる。人のために働く、いわゆるいい人なのである。でも自分の子どもをよその親に託したことはなく、それができないと言う。

下の子どもが生まれてからの上の子どもとの関係に悩む母親も多い。下の子どもが



生まれてから、上の子どもとの関係がそれまでのようにいかなくなり、どんどん悪循環にはまっていってしまったのである。上の子どものストレートな甘えを受け入れられなかったり、攻撃の形で向かってくる子どもと真つ向からぶつかってしまったりその様相は様々である。かと思うと下の子どもに対しては余裕を持ってかわいいと思えて育児をしつつ、上の子どもの時はそのようにしてあげられなかったことに対する罪悪感を引きずりながら上の子どもと過ごしている人も多い。そこには自分の子どもとの関係なのに、まだ年端もいかない子どもとの関係なのに、そうとは思えないほどの深刻さがある。それはまた後追いの時期や、二歳代の子ども自身もがいている大変な時期を親の方がもちこたえられないという悩みにも相通じる。

皆ぎりぎりのところで頑張っているのだろう。だから今の悩みを話し始めると途中から涙を伴うことが多い。周りの人がかけてくれる言葉に涙する人も多い。でも何をこんなに深刻になり、頑張っているのだろうか。

今から十年くらい前に私の周りにいた幼い子どもを抱えた母親たちには、何となくお母ちゃんと呼べるものがあつた。見かけではない。幼い子どもを抱えた日々には理屈抜きで浸っているという感じだろうか。いや浸らざるをえない状況だから腹を括って浸ろうという感じだろうか。こんなに子育ての大変さが叫ばれてはいなかったけれど、物理的な面での大変さは今以上だったと思う。だから助け合つて子育てしてきた



仲間という絶大な信頼を今でもおいているし、「そんなこと言ったら（子どもが）かわいそうだよ」というような言葉を投げ掛け合ってお互いの子育てに口を挟んでもいた。子どもを育てていく中での様々な時期や出来事を「そんなものは当然よ」とそう言い切れてしまえるかのような人たちがいた。今思えば、第二子、第三子の母親が多かったこともあるのかもしれない。そういう人たちがいてくれたことで、私はどれだけ助けられたか分からない。仲間であり、かつ先輩でもあった。今、私の周りには幼い子どもを抱えた母親たちは、「母親だけではない私」光線を放っている。だからといって決して母親であることを軽んじているのではない。むしろ一生懸命に子どものことを考えている。だからすべてが逆さまとっていいような文字で子ども同士が、「こんどうちでばーてー（パーティー）をやるからきてね」と書いた手紙をやりとりして遊んでいると「いつですか」と真面目に電話をかけてきたりする。子どもの友達関係を一生懸命に気に掛けているがゆえの行動なのである。そのズレた一生懸命さはお母ちゃんとはほど遠い。そんな中で、多分私も今の母親たちの少し先輩として位置しているのだろう。

はじめにあげた母親たちの深刻さもこのズレた一生懸命さにある。それは額面通りにすべてを受け止め、大人の土俵で子どもとがっぷり四つに組み合おうとする関係と、全く受け止めずに、切ってかわす関係との両極を行ったり来たりしている状況と



も受け取れる。例えば子どもが友達とトラブルを起こすと、面と向かって大人を相手にするような言葉で論し、かと思うとそのうちにそれを聞いている子どもの目つきが悪く、悪く悪く急いで怒鳴ったり叩いたりという力業に出る。手を替え品を替え、「とにかく分かりなさい」と一生懸命なのである。親からすれば子どもに対して譲歩に譲歩を重ね、その譲歩の限界が来ると、百八十度反転して支配するしかないという状況なのだろう。そこには上下関係しか存在しない。子ども同士の世界では、一触即発かと思われる状況が、ひよんなことで笑っちゃう場になったりすることがあるのに。そういう柔らかな関係を生成していく楽しさを実感するにはどうしたらよいのだろうか。

ある市が主催した子育て講座のタイトルは、「親が変われば子どもも変わる」というものだった。何だか対処療法みたいなタイトルだなあと思ったら、案の定、参加した母親（土曜日の開催だったが参加したのはすべて母親だった）たちの多くが、このタイトルに惹かれたと言う。自分を責めているともとれる。しかし自分が変わらなくちゃという思いの先にあるのは、子どもにも変わってほしいという思いなのだ。変わらなくちゃと思っている人が変われる訳はない。変わってほしいと願われている子どもが変われる訳はない。どちらも今の否定なのだから。ある時気づいて、あえて自分が変わろうと思うことも子どもの成長の節目節目ではあるけれど、子どもにも変えられちゃったり、気がついたら変わっていたりという事の方が子どもとの関係では多いよ



うに思う。何でも自分の意志で選択し、決定し、実行する。それは関係の中で生きてはいない。何で私たちはこんなにも頭でっかちになってしまったんだろう。

でも、親同士で話し合っていると、例えば自分の子どもをどうしても否定的に見てしまう親に、「子どもたち同士の間のほうがむしろその子どもの良さを分かっている」と話してくれたり、一緒に考える中で「今日から一日ひとつはよいところを褒めよう!」と対応方略ではあるが、方針を出してくれたりもする。同じような状況にある人たちが、自分や自分の子どものことについては見えないけれど、他の人の話を聞く時には子どもの立場を代弁したりアドバイスする立場になっている。それは回り回って自分に返っていくのだろうと思う。柔らかな関係を生成していくプロセスには、多くの視点を持つことも必要であり、同じような立場にある者同士だから分かり合ったうえでそれを提供できる。

私はこういう場に参加する時には仕事上の立場というよりは、年代が上の子どもを持つ母親という立場で参加するようにしている。その方が、母親たちの構えがなくなり、話しやすいということもあるのだが、本当の所は、十年以上を経てようやく乳幼児期の出来事のあるれこれを含めた状況ともども話せるからという方がむしろ当たっているような気がする。今幼児期にある下の子どものことを話しても、自分を取り繕ってしまうのではないかという心配もある。余裕がなく、頭でっかちで、本当の



ところでは人を頼れず、子どもを見ていてふがいなく思い、そしてまた子どもに申し訳なく思いもし……。今の母親たちを見てみると、かつての自分が重なって見えてくる。そして、でもあるときはそれで精一杯だったんだ、と今だからこそ思えて話せるし、破綻だらけでもそれでも今までの所まあなんとかやってきているよと言える。

親たちは、出口が見えないトンネルの中に入ってしまった、今どこにいるのか、いつまでこれが続くのかが見えなくてもがいている状況にあるのだと思う。その状況に理屈やお説教は通用しない。もう少し長いスパンで子育てを捉えられる者の目で今の状況を定位する手助けをすることで、子どもは先々どんな生活の場が広がり、親以外の多くの大人との出会いの中で育てられる機会を持ち、そしていずれ自分の人生を歩んでいくというトンネルの出口を見通すことで、今の時期の子どもたちの日々に大切なことを逆に考えられるようになればと願う。そしてまた子育ての中ではギブアンドテイクを閉じた関係の中で捉えないことが必要なのだとも思う。誰かに助けてもらったら、その人に対してお返しするという関係はすつきりするが、でも子育てには馴染まない。誰かのおかげで助けられた経験をしたら、自分もできる時に誰かを助けてあげればいいと思えた方がいい。それを世代を越えた連鎖で考えれば、かつてそうだった立場の者だから助けられることもあるのだと思う。

(お茶の水女子大学)

いま、子どもたちは

児童虐待の実像とその防止への支援



落合 美貴子

はじめに

現在、子どもたちの状況は、家庭においては虐待、学校においては学級崩壊や不登校、地域においては援助交際や切れる少年たちの問題と、マスコミに取り上げられない日がないほどの混迷した状況が続いている。これらの要因として、父親不在や母性

の喪失、核家族化や少子化による家族ダイナミクスの変化、学力偏重・個性圧迫の閉塞的な教育体制、都市化による近隣関係の希薄化や子どもたちの集団遊びの減少等、専門家によるさまざまな指摘がなされており、今や、子どもを育てることは非常に困難な課題となってしまった感がある。

私は、これまで児童相談所や精神保健センターに

において、長らく心理臨床の仕事に携わってきたが、今回、その中でも特に子どもの発達に重大な影響を与える「児童虐待」の事例を取り上げ、その実像と防止への支援の在り方について考えてみたい。

A子の母の場合

―家族の歴史と虐待

A子は一歳の時両親が離婚し、母方祖母に引き取られた。その後母は再婚し、異父弟が生まれたが、二年後の小学校入学を機に、A子は義父と実母と二歳の弟が住む家に引き取られた。義父ではなく、実母による虐待が生じたのはその三カ月後からだつた。A子が「言うことを聞かない」と言つて母はA子を叩き、泣くとさらに叩き、徐々に体罰はエスカレートしていった。通報により、地域の関係者による訪問等が開始された。母は当初「家の方針で厳しくしつけているだけだ」と訪問を拒んだが、母を責めないという関係者の方針により、しばらく後A子

の施設入所を了承した。その後父を含めて家族関係の改善が図られ、最終的にA子は家庭復帰を果たすことができた。

母のA子への虐待はなぜ起こつたのだろうか？

そのことを解くカギは、A子の母の生育史にあった。A子の母方祖母は、離婚、再婚を数回繰り返して、A子の母は、幼少期より複雑で不安定な家庭環境に育つていた。母は「いつまた家庭が壊れるか常にビクビクしていた」と語り、「自分は絶対母親のようにはならない」と決意していたにもかかわらず、母親と同じように自分も離婚してしまった。だから「今度こそ、失敗できない」という追い詰められた気持ちを抱き、「A子が良い子にしないといふ夫がどう思うか」と常に気にしていたという。母のこれらの言葉にあるように、A子の母は、その生育史から、家庭崩壊（離婚）を恐れるあまり、夫のA子への評価を過剰に気にしていた。そのことから、A子のしつけを必要以上に厳しくし、離れていた寂

しさに甘えたい A 子の気持ちを受け止める余裕もなかったのである。これらの伏線として、祖母に預けられていた間十分なしつけを受けていなかった A 子の実態や、血のつながりのないことから虐待に見て見ぬ振りをしていた夫の態度があるが、要因の中心をなすものは母の生育史であろうと思われる。A 子の母は、そのような自分の心の様に気づき、徐々に精神的安定を取り戻し、A 子に対しても母親らしい優しさを示すことができるようになっていった。

この A 子の母の場合、自身は祖母から体罰は受けていなかった。しかし、親が離婚、再婚をくり返す中で大きな心理的負担を抱えながら生育した歴史が、確実に世代間伝達されたといえるであろう。公的な相談機関では、A 子の母のような育ちの問題が次世代に伝達される事例が圧倒的に多く、しかもそのような例の多くが、A 子の母のように公的、私的を問わず他者の介入を拒むという、援助に非常な困難さが付きまとうのである。

それに対して、自ら援助を求める B 男の母のような事例もある。

B 男の母の場合

― 状況性と虐待

B 男は、転勤族の父と母の間に生まれた一人っ子であったが、B 男が三歳の時、父の転勤により一家は父母双方の郷里から遠く離れた地に引っ越した。父は営業畑で仕事に忙殺され、帰りは遅く休日返上の日々であった。取り残された母と B 男は、知り合いない中で大部分の時間を二人だけで過ごすようになった。母は B 男が反抗期に入り、これまでのようにいうことを聞かなくなったこともあって、ある日従わない B 男を激しく叩いてしまった。後で後悔の念が沸いてきて B 男に謝ったが、その後も虐待をくり返すようになり、そのことは父にも誰にも言え



ず隠し続けていた。いくつかの不運が重なっていた。元々B男の母は友人が少く、親しい郷里の友人がその時期家族の看病で余裕がなく、母は連絡を控えていた。母方の祖母は母が十代の後半に亡くなっており、愚痴をこぼせる女兄弟もいなかった。B男の母はまったく孤立無援の状態だったのである。

転機はB男の母が思いきつてある機関に電話相談したところから生じた。母は、「どうしても言うことを聞かないので、頭が真っ白になっちゃって…、叩いちゃうんです」「もうどうしていいかわかんないんです」と泣きながら語った。そこから保健所の子育て相談を紹介され、その相談の中で、幼児を持つ母親のピアサポートグループへの参加を勧められたのである。そこは、数十人のメンバーにより、メンバー同士の集いの他、保健婦や心理士を招いての学習会も開くなど精力的に活動しているグループであった。

B男の母は、当初不安を感じながらも、同年齢の子を持つある母親がいつも積極的に誘ってくれたこともあって、間もなくグループに打ち解け、数カ月後には、グループ以外にもメンバーと交流できるようになっていった。母親とB男の生活は開かれ、虐待は間もなく消失し、母もB男も明るさを取り戻したのである。母は「自分だけが…とと思っていましたが、他にもやっぱり叩いてしまうっていう人もいて、自分だけじゃないと分かってほっとしたっていうか…」「B男も他の児とよく遊ぶし、グループに入って本当に良かった」と語っている。

現代の核家族化や少子化の現状を見れば、B男の母のような虐待はいつでも起こっても不思議ではない。公園デビューという言葉も使われて久しいが、若いお母さん方自身がその少子化の中で育ち、新たな人間関係を作り出すのに困難さを伴っているのが現状と思われる。

彷徨える子育てを乗り越えて

この二つの事例は、今生生じている「児童虐待」の典型的な二つのタイプを示している。一つはA子の母のように、背景に自身の育ちの問題があり、それが母親になった時に子育てに反映されてしまうという、まさに世代間伝達のタイプであり、今一つは、地域の子育てサポート機能の希薄化や、若い母親の対人関係技術の拙さや、仕事に縛られて共同養育者としての役割を取れない父親や、そういうあり様に父親を追い込んでいる経済優先の社会システム等に根差した、今日的な虐待のタイプである。

二つの事例とも、現代の子育て文化のあり様から当然出現したものではあるが、支援の面から見るといくつかの大きな違いがある。第一は、A子の母は他者からの支援をむしろ拒み、B男の母は自ら援助を求めたという点である。A子の母のようなケースでは、支援を拒み続け、延々と虐待の連鎖を生み、

最後には悲惨な形でマスコミに報道されることになってしまうのである。第二は、「虐待」

という意識の有無であ

る。A子の母は虐待しているという意識は全くなく、自らは「正しくしつけている」つもりであり、

このことが援助の困難さの背景にある。一方B男の母は虐待意識を持ち、罪悪感や無力感に陥っているが、その意識故に援助のレールに乗ることができ、

最悪の結末は回避できるのである。第三は、ケアの質の違いである。A子の母のような場合は、専門機関の関わりが必要となり、母自身の心理療法や子ども

の心理的回復のための専門的支援、あるいは状況によって親子の分離を考えなければならぬ。恐らく

A子の母はピアサポートグループに参加したとしても、その中で自ら共感的な関係を作ることには難しかったと思われる。その点、B男の母のような場合



は、まさにピアサポートグループに適合する例であり、さまざまなソーシャルサポートの介入が期待されるケースである。

このような虐待のタイプの違いとケアやサポートの違いは、マスコミがこれらを十把一絡に扱っていることもあって一般にはあまり知られていないが、その支援を考える時、この見極めは非常に重要であると思われる。いつでも児童相談所等の専門機関が対応することが適切とは限らず、専門機関の関わりが必要不可欠のケースと、ピアサポートグループのようなソーシャルサポートの守備範囲にあるケースを関係者が見極めることが大切である。そのためには、子育てに関する日常的なネットワークが、保健所、幼稚園、保育園、民生委員、各種専門機関等の関係者により構築されていることが必要であり、そういうネットワークチームの連携により、活用できる社会資源やケースの見立てに関する情報交換が速やかに行われ、危機介入の実効をあげることがで

きるのである。

現在、各関係者から児童相談所や養護施設の充実が叫ばれているが、多少の整備では追いつかないほどの虐待の増加が危惧されている。A子の母を考えれば世代間伝達が続々と拡大再生産されているのが現実であると思われる。また虐待はもはや一部の人の問題ではないことはB男の例で明白である。困難ではあっても、専門機関の充実に加え、子育て支援のネットワーク構築を図っていくことが急務であると思われる。関わりのある人々が、連携し知恵を出し合って行く中で、世代間伝達を凌駕する「サポートの連鎖」が起こることを期待したいと思う。

(臨床心理士)

☆文中の事例はプライバシー保護のため変更してあります。

恐ろしさを遊び化する子どもたち

永田 陽子

最近、阪神大震災や大島の噴火などの天災、あるいはニューヨークの国際貿易センタービルの崩壊など歴史に残る大事件が起こり、子どもたちもテレビなどからその無残な映像を目にすることが多い。中には身近なこととして受け止め不安を抱いている子どももいる。つい半年前まで国際貿易センタービルの前の公園で遊んでいた四歳児のA子は、テレビで

何度も流されたビルがくずれられる映像をくいいるよう
に見て、夜泣きをしたそうである。また、ニューヨークに行ったことのないB子は自分のマンションが崩れるのではないかと不安に思い、「おうち崩れない？」と何度も母親に聞いたという。このように、三、四歳でも世の中で起こっているさまざまな出来事を、実際に経験していなくても映像などと結

びつけて不安に思うことも多い。

さて、幼稚園や保育園では非常事態に備えて避難訓練をすることが義務づけられている。しかし、避難訓練そのものが子どもの不安をかきたてることもめずらしくない。といつてもふざけ半分の遊び仕立てな活動の一部にしてしまえば訓練の意味がなくなってしまう。その兼ね合いはとても難しく訓練をするたびに悩むところである。ここでは園で初めて経験した避難訓練で不安を感じたR君（三歳児）が、遊びの中で自ら始めた避難訓練ごっこをしながら、その不安を乗り越えていく姿をあげてみよう。

G君の意外な反応

初めての避難訓練

三歳児が入園して二カ月がたち、そろそろ自分の先生やクラスがわかり始めた五月末、この子どもたちにとっては初めての避

難訓練をおこなった。不安を少なくするために、園庭で遊んでいた子どもたちも部屋に入り、先生のまわりに集まった時に始まるように設定した。キンコンカン「これから地震が起きたときの練習をします。恐くありませんよ。みんな先生のお話をよく聞いてくださいね」と園長先生の声でそれぞれのクラスに放送が入る。キンコンカンとなった途端にどこから聞こえてくるのかときよろきよろする子ども、不安を感じて先生にかじりつく子ども、平然と遊びを続ける子どもなどさまざまである。G君は急に顔がこわばり泣き声をあげながら、狂ったように庭へ飛び出しくるとまわりはじめた。担任の私はい



つも元気にはつらつとしているG君の意外な反応に驚き、G君を抱きしめ「大丈夫、大丈夫」と落ち着かせた。その日はまだ防災ズキンは被らずに園庭の大きなけやきの下に集まり訓練を終えた。その次の日からG君は登園してきた時や遊んでいる時にも思ひ出したように「今日は避難訓練ないよね」と何度も確認してきた。その都度、私は「ないわよ。でもG君が大変な時は先生がいつでも守ってあげるよ」と返した。

思いがけない事態に緊張してしまうのか？ 状況のわからなさに不安を感じたのか？ 放送がこわいのか？ など、いろいろと考えた。お母さまにも伺うと、多少状況がつかめない時に顔をこわばらせることはあるが、走りまわったりすることはなかった。もちろん、地震にあったことも、そうしたことを家族で話し合うこともなかったということであった。G君の園生活をみているかぎりでは新しい

状況にも、三歳児らしい不安をのぞかせることはあっても、特別に他の子どもと変わったところは見られないし、思い当たることはなかった。原因はともかくとして、まずは一緒にいることでG君の不安を受け止めようと思った。

恐さを表わし、遊び化する

九月のある日、G君はメロディを口づさみながらぶつぶつ言って登園してきた。何を言っているのか聞いてみると「放送します。放送します」と誰にというのではなく言っていたが、しばらくするとまたいつものように遊び始めた。あとで、お母さまから、夏休みにいなかで夕方に町会の放送の音楽がなると急におびえたと伺った。そこで、G君は避難訓練の放送が始まるキンコンカンという音にも不安を感じていたのかとあらためて思った。G君は不安になったことをあえて自分が園生活の中で口に出して

見ることで、不安を解消していったのだろう。次の訓練の時は事前にG君に「今日は避難訓練があるけれど大丈夫だから先生の近くにいてね」と伝えた。その日は放送が入ると表情を硬くしたが、以前のよりに走り回ることはなかった。

「幼稚園が火事ですよ。みんな避難しましょう」

十月のある日、部屋の中で二、三人の友だちとおうちごっこをしていたG君はごちそうを作ってテーブルに並べていた。ところが急に色画用紙をとりに行くところを見るとそれを巻いて口にあて「地震です。みんな避難してください」とまわりで遊んでいる子どもたちに言っ歩いて。そして、G君は庭にでるとすぐ目の前の梅の木のところのござを敷いてあるところへ行き、「ここに、避難してください」と言っている。そこは怪獣ごっこの基地であったが、そこで遊んでいた同じクラスのR夫、K夫、Y

夫は自然とG君の提案を受け入れ、頭に手を当てながら座り始めた。部屋にいた私も一緒に外に出てござに座った。すると、すべり台をしていたM子も手を口にあて、「地震ですよ。あそこに避難してください」と部屋の友だちに呼びかけた。製作コーナーで車を作っていたY夫、A夫たちも出てきた。ござの上は満員になった。部屋をのぞきに行くと部屋の中には誰もいなかった。そして誰が消したのか電気も消えていた。しばらくすると、子どもたちは何もなかったようにまた元の遊びを始めた。ござはまた怪獣ごっこの基地になった。

ある日、突然起こった出来事だった。あれだけ避



難訓練をこわがっていたG君が考え出した遊びで、この遊びを通して自分の中のおそのれの気持ちを持ち越えようとしているように感じた。自分がことをおこす元になつてゐることも、とても意味があることだと思つた。また、このG君の投げかけにクラスの殆どの子どもが加わつたことにも驚いた。きつと、初めての避難訓練の時のG君のおびえた様子をまわりの子どもたちが受け止めていたのかもしれない。友だちとのかかわりも深まつてゐるのだろう。そして、その時に自分の中にも共通する恐さを感じながら、我慢していたのかもしれない。だからこそ「地震だ」という呼びかけに、手を頭に当て部屋の電気を消してくる子どもたち。みんなきちんと靴を外靴に履き替えて出てきたところは、これは遊びよ、うそつこよ、というわくわくとしたイメージが共有されている感じもあつたのだろう。それ以後、何度か避難訓練ごっこが行われた。時にはH夫が「地震

が起りました」とみんなに声をかけると、G君がそれに加わり、机の下を指差し「ここに避難してください」と言うこともあつた。G君は「今日、避難訓練ある？」と聞いてくることもなくなつた。この遊びも二学期の後半にはあまり取り組まれなくなつた。

G夫は訓練に落ち着いて参加できるようになつた。園生活の中で友だちを巻き込み遊び化して自分の弱さを持ち越えていく子どもの力はすごい。子どもが園生活の中で繰り返し広げる遊びは、その子なりに意味があることだと改めて気づいた出来事だつた。これも自由な遊べる時間があるからこそできることである。その時間や場所をこれからも十分に保証してあげたいと思う。

(日本女子大学附属豊明幼稚園)

子どもの自己コントロールの育ち

—日本保育学会第五十四回大会シンポジウムから—

井上 真奈

矢田 美樹子

五月に仙台で開催された日本保育学会第五十四回大会では、「子どもの自己コントロールの育ち」というテーマでシンポジウムが行われた。当日は会場が埋まってしまふほど参加者が多く、「子どもの自己コントロールの育ち」が高い関心を持たれているテーマであることが窺われた。このシンポジウムの

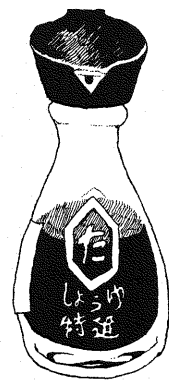
特徴は、子どもの問題性に焦点を当てただけでなく、他児や保育者との関係の中で、自己コントロールを見ていこうとするところにある。我々はこの視点に興味を持ち、実際の保育の中でそれをどう育てていくのか、具体例を通して学びたいと思い、参加した。

「子どもの自己コントロールの育ち」の

前提となるもの ―シンポジウムの報告

このシンポジウムを通して、子どもの自己コントロールとは、子どもが自分は何が大事で何を我慢できるかわかった上で、相手や状況に応じてどの程度自分を出していくか、その加減を調整する力であると捉えた。それは、保育者や親が「こうしなさい」と指示したり「これはだめ」と押さえつけて育つものではなく、子ども自身が様々な感情的経験を通して試行錯誤しながら身につけていくものである。

保育者は、子どもの①待てない②攻撃性が抑えられない③パニックを起こして立ち直れない、というような行動に出会ったときに、子どもの自己コントロールの育ちを問題視する。たとえば、自分を抑えられずぐにぶつとぶつという行為は、動作が大きく目につきやすいため、保育者はその子どもの自己コント



ロールの育ちを意識的に見ていこうとする。今回のシンポジウムでは、周りを気にして自分を出すことなく抑えてしまう子どもの自己コントロールの問題についても取りあげられた。このことが今まで余り問題視されなかったのは、ケンカなどの表立った問題が起きず保育者の目にはとまりにくいからだと考えられる。しかし、自分を抑えられない子どもも、自分を表現できない子どもも、相手や状況に応じてどの程度自分を出すか加減できない、つまり自己コントロールできないという点で同じような状態にあるといえる。今回のシンポジウムでは、このような子ども達が、自分の能動性や存在感を出し、周り

の状況に応じて自分を抑えられるようになるためには、保育者や友達とのかかわりの中で、安心して自分を出せる場と、自分をいろいろな形で表現しながら試していく機会が求められていることが強調された。(しかし、ADHD(注意欠陥多動性症候群)やアスペルガーなどの発達の障害を持つ子どもに対しては、担当の保育者一人に対応するには限界があり、園全体で対応できるように、更に必要に応じて専門機関と連携する必要がある。)

我々は、今回のシンポジウムから、子どもの自己コントロールは、「人とかかわる力」「見通す力」「自尊心」が関連して育っていくものであると捉えた。保育者が子ども一人一人の本来の姿に目を向け、「人とかかわる力」「見通す力」「自尊心」の三つを保育の中でどのように育てていくかについて、シンポジウムで述べられたことを以下にまとめていきたい。

1. 人とかかわる力を育てる

自己コントロールは、人とかかわる力が基盤となる。それは、「自分も相手も大事」にしながらかかわっていく力であり、子どもの自己表現や他者理解を促していくものである。二、三歳になると子どもは自分を主張し始め、周囲の状況にも興味を持ち、いろいろな働きかけを行うようになる。しかし、言語表現が未熟で相手の気持ちを推測したり自分の意志を伝えることが十分にできないことから、子ども同士での調和的なコミュニケーションを行うことが難しい。そこで保育者が、相互交渉が円滑に進むように援助していくことが必要となる。たとえば、物の取り合いが生じた場合、保育者が、子どものことばにできない「貸してほしい」という要求や「まだ使いたい」という気持ちを汲み取り、相手に伝え、お互いが相手の気持ちに配慮できるように促し、同時に待つことや「貸して」と言うことなど

を、直接教えたりモデルとなる行動を示して伝えていく。このような経験を積み重ねていくことで、子ども達は保育者がかかわらなくても、「貸して」「まだいや」と自分の気持ちを表現し、更には相手の気持ちに気づき、「もう少ししたら貸すね」というような「相手も自分も大事」にしたかかわりを持てるようになっていく。

2. 子どもの「見通す」力を育てる

子どもは前述のような相互交渉の中で、自分の気持ちを表現したり相手の気持ちに気づくという経験を通じて、「貸してね」と言えば貸してもらえるとというような見通しを持つようになり、順番を待ったり許可を求めるなど、「自分も相手も大事」にしながら自分の欲求を満たすための方略を学んでいく。「今何をすればよいのか」と自分を客観視して考え、次の振舞いを過去の経験をもとに決定し、それ



によって得られる結果を思い浮かべることができ力、つまり「見通す」力は、子どもが自己をコントロールできるようになるための前提である。

大人は、自分の為すことを頭の中で言語化しコントロールできるが、ことばが未発達な子どもは、自分が何をしているのか、次に何をするのかがまだ混沌としている。このような時期に、保育者が子どもの気持ちや行動を符号化する（ことばで表す）ことを通して、子ども自身が「現在の自分」を意識する経験と、同じような状況を繰り返していろいろな自分を試す経験を積んでいくことが、子どもの「見通す」力となり、ひいては自己コントロールの育ちにつながる。

3. 自尊感情を育てる

子どもは、自分を客観化することで、自分はこうなんだという自己概念を形成し、何が大切で何を我慢できるのかわかるようになる。自己概念の形成に伴って生まれてくる自尊感情は、自分はどう在りたいか、自分をどう出すかということなどに影響を与えるため、自尊感情を持つことが自己コントロールを育てるためには必要である。

しかし、今回のシンポジウムでは、子どもが関心を持ち自分自身の力で試す前に、親が先回りして教えたり稽古事をさせてしまうために「自分でできた！」と思える経験が少なかったり、それを認めてくれるような親のことばによるフィードバックが乏しいために、自尊感情を持ちにくい現状が挙げられた。子どもの自尊感情と、自信を持って「自分はこうだ」と表現する力を育てていくためには、親や保育者の、子どもがいたずらや失敗を恐れずいろいろ

なことを自由に試せるような雰囲気をつくったり、「ああ、できたじゃない、その調子」というようなことばでのポジティブなフィードバックをすることが大切である。

終わりに

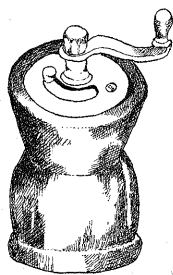
今回のシンポジウムでは、子どもの育ちの側面である自己コントロールについて、保育者や友達との関係の中でそれを如何に育てていくかを様々な事例を通して考えることができ、子ども一人一人が本来の姿を出しているかという視点を保育の中に取り入れていくことの大切さを感じた。実際の保育の中にそれをどのように織り込んでいくかを考えていくことが、これからの課題である。

(お茶の水女子大学大学院)

メディア文化黙示録

―二つの結末

山本 政人



しばらく前に『アヴァロン』という映画を見た。時は近未来。クリアすれば多額の報酬が得られる（しかしゲームオーバーになると廃人になってしまうこともある）仮想戦闘ゲーム「アヴァロン」に人々は熱中していた。主人公の女性は卓越したプレイヤーだったが、あるとき一定の条件を満たして最終ステージをクリアすると秘密の隠しステージに行けるといふ噂を耳にする。その隠しステージをクリアすれば莫大な報酬が与えられるともいわれていた。そして主人公は難関を乗り越え、ついに隠しステージに挑戦する権利を得る。

ところがその隠しステージのクリア条件は、「アヴァロン」の仮想世界のなかに逃げ込

んだ主人公のかつての仲間を捜し出し、現実世界に連れ戻すことだった。隠しステージは「リアルステージ」となっており、ゲームをスタートすると、そこは現実の世界よりリアルな世界だった。映画では現実世界はセピア画面で、「リアルステージ」はカラー画面になる。観客は作り物の世界から現実世界に戻ったような印象を受ける。

主人公はすぐにかつての仲間を見つけ出し、彼に銃口を向ける。すると彼はいう。「こちらが現実だ。撃つてみる。死体は消えないはずだ」。主人公は躊躇する。主人公がそのまま引き金を引かないのではないかと思わせるが、次の瞬間、彼女は引き金を引く。ターゲットは血を流して倒れ、観客はやはりこちらが現実なのかと思いつく。しかし彼が息絶えたとき、彼の死体は消え去る。やはり「リアルステージ」は仮想世界だったのだ。

主人公は現実よりもリアルな仮想現実を現実であるとは認めなかった。それは勇気あることだと思った。仮想現実が現実よりもリアルで生き生きとしたものだったら、そちらを選ぶ者の方が多いのではないだろうか。ましてそれが自分の理想とする世界で、そこで自己実現ができるとすれば、それが作り物であるとしても、それを否定できる者は少ないのではないか。そんなことを考えた。

この映画を見て思い出したのは、『スタートレック』のあるエピソードである。『スタートレック』シリーズは随分昔から放映されていたアメリカのテレビシリーズで、日本でもときどき放映されていた。こちらは遠い未来。人類が宇宙に進出し、宇宙探検の過程でさまざまな知的生命体と遭遇するというSFテレビドラマである。最初のシリーズは、宇宙

スポックが船を乗っ取ったのは、前船長をその惑星に連れて行くためだった。実はその惑星には、やはり事故で重い障害を負った地球人女性がいた。彼女は幻覚のなかで障害のない姿で暮らしていた。前船長とスポックは彼女を惑星から連れ出そうとしたが、彼女はそれを拒否し、幻覚のなかで生きることを選んだ。スポックは同じ境遇になった前船長を彼女とともに幻覚のなかで暮らさせようとしたのである。前船長は惑星に降り、ラストは健康な姿の二人が肩を抱き合いながら空に向かって手を振り、エンタープライズが去っていくという感動的な終わり方だったが、割り切れないものが残った。

二人は幸せに暮らせたかもしれないが、それは幻覚によるものである。前船長もスポックもかつてはそれを否定し、そのなかで暮らしていた女性を引っ張り出そうとまでした。ところが未来の超科学でも治すことのできない障害を負ってしまった前船長のために、幻覚によって作られた世界をむしろ積極的に認めたのである。「ご都合主義」というか、偽りの世界を一旦は否定しながら、障害という困難のためにそれをあつさり肯定するのはどうかと思っただのである。

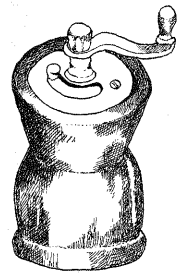
これと同様の状況は現実にも存在している。苛酷な現実を逃れて偽りの世界に飛び込んでいく人がいる。しかし偽りの世界が理想とは異なり、自己実現などできるはずもないことがわかって、再び現実に戻ってくるケースも少なくない。しかしもしそれが理想の世界で、自己実現も可能であるならばどうなのか。現実に戻ってくることはないのではあるまいか。

もう一步進んで考えてみると、人間にとって理想的な世界を、それが偽りだからといって否定できるのだろうか。それが偽り＝物質的基盤をもたないからだめというのは、実は唯物論的偏見であって、物質的基盤を持つものが持つまいが、人が精神的に充たされればそれでよいのではないか。これはなかなか手強い論理ではあるが、結局のところ物質的基盤は否定できない。つまり食うに困らなければ偽りの世界も悪くないが、いかに精神的に充たされよう

が、腹がある程度満たされなければ始まらない。苛酷な現実を選ぶか、理想的な虚構を選ぶかの基準は案外単純かもしれない。ほとんどの人は腹が満たされる方を選ぶだろう。一部そうでない人もいるには違いないが、つまるところ現実と虚構とどちらを選ぶかというのは、一定の物質的基盤の上に成立する問いである。

したがって物質的基盤が崩れればそれは一挙に崩壊するのだが、メディアは虚構、理想、偽りの領域を飛躍的に拡大した。しかしテレビから始まった革命は、ビデオ、ゲーム、そしてインターネットの登場によって、どうやら行き着くところに行き着いた観がある。メディアで幸せを手にすることができるとかという問いも、そろそろ答えが見え始めたようである。

メディアは個人の内面世界を拡大・深化させた。現実の生活にも革新をもたらした。必要な情報、必要な物を探し出し、手に入れることができる。見知らぬ人と知り合い、情報



や意見を交換することができる。自分が何者であるかを知られることなく、自由に意見を述べることができる等々。これだけでも理想は実現されたかのように思える。メディアの世界では人は自由で平等になる。性別も年齢も職業も自由に変えられる。現実社会での能力や地位や財産など、メディアの世界では意味をなさない。まるで「神の前での平等」の具現化である。これは従来の秩序「アンシャン・レジームの崩壊をもたらししている。その一つの現れが大人と子どもの関係の変化である。親と子、教師と生徒、大学教授と学生、それぞれの力関係は大きく変わった。かつて存在した明確な力関係はもはやなく、むしろ逆転している。親は子に振り回され、教師は生徒に反抗され、大学教授は学生から蔑まれる。そうした力関係を再度逆転するために、力づくで子どもを押さえ込みもつとすることがしばしばである。虐待、体罰、さまざまなハラスメントが後を絶たない根源はおそらくそのあたりにある。

これからも人は現実と虚構の間を揺れ動き続けるだろう。選択は人それぞれである。しかし二つの選択肢はかなり異質なものである。神を信じるか悪魔を信じるかぐらいの違いがある。メディアがもたらしたのは、昔でいえばさまざまな異教の民が共存しているような状況である。異教の民同士が理解し合うのは至難であるが、現代のメディアはそれを可能にすることができるだろうか。

— 終 —

(学習院大学)

撮影・平野 清





ある日

特集 〈伝える〉

声で伝えること

藤井 チズ子

生まれてすぐの赤ちゃんが母親に抱かれると泣き止んだり、お乳を探す行動を示すことは既によく知られている。

シンガーソングライターの平松愛理さんは大変な難産の末、帝王切開で出産した。その日のことを日本経済新聞平成十三年十月二十三日夕刊の「こどもと育つ」欄で次のように述べている。

「一九九六年六月二十日娘が元気な産声をあげた。抱っこしたかったが腕には点滴が刺さっている。だからその代わりに「ハッピーバースデー」を歌った。おなかは切断中、ウギアウギアと泣いていた娘が首をクーと伸ばして泣きやみ聞きしていた。歌い終わるとまた、首を縮め泣き始めた。通じた。ママの声がわかった。生まれたばかりの

娘に教わった、歌はうまいへたじゃない、伝えようとする気持ちなんだ。この日の思いはその後、自分の音楽にも大きな影響を与えた。」

平松さんにとつてなんと感動的な瞬間だったことか、抱っこしたいが赤ちゃんを抱けない、精いっぱい母親として赤ちゃんをあやしたい気持ちが歌で伝わっている。自分の気持ちをどう伝えたらよいか、この経験を通して音楽にも大きな影響があったという。恐らくその後も幸せな母娘関係が続いていると思う。

*

「伝える」というテーマを与えられて、最近一番強く感じているのは、十三年九月十一日アメリカで起きた同時多発テロでハイジャックされた飛行機の中から乗客が家族へかけた電話である。携帯電話の普及がこういう非常時に威力を発揮する。ある青年は母親に、ある女性は夫に、ある男性は

妻に電話で状況を伝えた。

「お母さんを愛しているよ」という息子さんの声が最期のことばとなったと、母親の悲嘆にくれた姿がテレビに映し出され、ひとり息子を突然失った母親の悲しみが画面から切々と伝わってきた。全世界に伝えられた貿易センタービル崩壊のニュースは、人々の脳裏に強い衝撃を与えた。これほど「伝える」ということばの重みを表している状況はないと思われる。

テレビは世界をひとつの地球村とし、現代のマス・メディアが伝える情報の影響ははかり知れない程大きいものがある。

私はかつて放送局でアナウンサーとディレクターの仕事をしており、マス・メディアの内側について情報を伝える役割をしていた。



ラジオやテレビでアナウンサーのニュースを聴くと、いかにも楽々とニュースを読んでいるように思える。しかし実際に原稿を読む立場になると、文章を読むことは難しい。

新人時代は、不特定多数の視聴者に話しかけることは焦点が定まらない感しで掴みどころがなかった。

私はスタジオでマイクの向こうに、家族や友人・知人の顔を思い浮べて彼らに対して放送するという気持ちで原稿を読むようにした。その内に視聴者からの反応や手紙が来るようになって視聴者との距離が縮まり、次第に楽に読めるようになった。

ベテランのアナウンサーは、視聴者のひとりひとりがいかにも、自分に話しかけているように感じるような読み方をする。ニュースはアナウンサーによってよく分かるものになったり、分かりにくいものになったりもする。

勿論文章の良し悪し、用語を分かりやすく説明することもたいせつな要素であるが、読み方の技術と読み手の意識によって伝わるものが変わってくる。

放送の場合ニュースは「ニュースをお伝えします」といっているように、本来伝えるものである。実際ニュースアナウンサーは、一字一句を読み上げるといふアナウンスメントでなく、ニュースの中で見出しになることばを探してキーワードにし、そのキーワードを意識して伝えるように原稿を読んでいく。最近のニュースは一分間に四百字を超えるかなり早いテンポで読んでいるが、キーワードを際立たせるために、キーワードの前に間を置くか、そこに音程を高くする抑揚をつける、テンポを少しゆっくりさせるなど、前後のことばとの関係を把握しながら読む。わざとらしく強調するのではなくキーワードを伝えていく。それによって視聴者はどんなニュースかを聴き取るこ

とが出来る。

さらに放送では、読み手の人柄、誠実さなどが自ずと現れるので、「声は人なり」といわれている。

マス・メディアで情報を伝えるには、それなりの技術と工夫が必要なのである。

私はアナウンサーの経験をもとに、カルチャーセンターの朗読教室の講師のほか、幼稚園で先生やお母さんたちに朗読を教えている。

子どもに本を読む、おはなしを聞かせるなどの場合もききに感動が伝わるような読み方や話し方が望ましい。しかし、学校では文章の朗読の方法を教わらないことが多く、ただ文字を読み上げればよいと思っている人が多い。

朗読の場合も段落を読解し、大事な語句、重点を中心に高低のイントネーション（抑揚）をつけ、間を取って読むことがたいせつである。

私は先生やお母さんたちが、子どもたちにおはなしの面白さ、楽しさ、作家の心、読み手の気持ちなどを伝えていただきたいと思う。

*

「伝える」という意味はさまざまである。言語、生活習慣、情報、伝統行事、芸術、遊び、家事など広く文化全般の範囲と、心や感覚の世界とがある。

また、親子・夫婦、友人、教師と生徒などの人間関係の間で多くのことを伝え合っている。だが真実心の絆で伝え合う関係が生きる力になるのではないか。私たちは次世代の子どもたちに、家庭や学校、社会で心豊かな文化を伝えていくこと、人とのかわりの中で「伝え合うこと」を大事な心の働きとして考えたいと思う。

（共立女子大学・元NHKチーフディレクター）

伝えたい思い、

伝わる思い、感じる心

渡辺 満美

「あなたたちは処置や治療をするのではなく、手当てをするのです。子どもの傷に手を当てるだけでなく、その子の心にも手を当て、気持ちにも添うのです。そして、その子から伝わってくるものを感じる心を忘れてはいけません。」

この言葉は、私が大学時代に聞き、とても印象に残った言葉です。私がこの言葉を聞いたのは、

まだ現実でない子どもたちとの生活を想像し、最も自信のない看護の勉強（知識・技術）をもっと知りたいとあせっていた時期でした。そんな時に聞いたこの言葉は、「看護に実技は必要。しかし、それだけでは補えないものがある」といわれた気がしたものです。

— 気持ち伝わったのでしょうか… —

幼稚園の保健室はジュータンが敷かれ、靴を脱ぎ、ごろごろとしたりも出来ます。そして、小さなテーブルが二つ、二人掛けのソファアが二つ、たくさんの絵本。もちろん、この他にベッド、ロッカー、職務の机もありますが、まるで小学校以上の養護教諭が欲しいと思うような空間がひろがります。そこでの生活は、今までの私の環境をすべて変えました。

以前は、私を必要として子どもたちは保健室に訪れていました。そして、朝から放課後までほとんど途切れることなく、子どもたちとゆっくり一対一で対応して来ました。ベッドに寝ながら、ぼそぼそと話し始める子どもや放課後、数人で訪ねて来る子どもたちとは、いろんな話をしました。しかし、今は保健室に入ってくる子がすべて、私を必要として入って来ている訳ではないのです。保健室というちょっと静かな場を必要とし

ていることもあるのです。多くの子どもたちと過ごす中で、必要だと感じる子どもにも必要だと思わしきに対応するのです。そして、何より自分のけがした場所、どれくらい痛いかなどはもちろん、言葉で伝え合うことが難しかったのです。

だれか泣いている…

「なんだか、調子が悪いみたいなの。ちょっといにかしら？」と担任の先生からの言葉。「なぜ、泣いているのかな。何か嫌なことでもあったのかな」と思いながら熱を測ってみると、熱があったのです。私は担任の先生の「調子が悪いみたい」という言葉からしか、子どもの状況を感じることが出来なかったのです。「今まで何を



してきたんだろう。なんて、言葉から伝わってくるものに頼っていたのだろう」と思わされました。今なら、熱があるのかもしれない、体調が悪いのかもしれないと子どもの様子から何か感じることができるとも、あの時の私は、今までと違う環境に大切なことを忘れていたと思いました。

幼稚園の子どもたちは言葉を使い、相手に伝えることはまだまだ難しいです。しかし、伝えてくることがない訳ではないのです。子どもと手をつないだ時、伝わってくる子どもの思いがあります。子どもを膝に乗せ、本を読んでいると呼吸から伝わってくるものがあります。子どもに手当てをしていると、そこにも身体から伝わってくる気持ちがあります。

すごい勢いであばれていた子が、言葉はなくても先生に抱きとめられて、落ち着くことがよくあるように思います。それも、二人の間では、呼吸

が一緒になって子どもは落ち着いてくる。それだけではなく、そこから先生も何かを伝えていき、子どもも何かを感じ取っているのではないかと思っています。

この言葉にしている思いは、こちらがその子を感じたいと思った時に伝わってくるもので、相手を感じたい、知りたいと思った時にだけ感じたり、気づいたりするかもしれないと思います。

でも、ここには伝えたい側がそう思った、そう伝わったという、思いも入ってしまうのです。だから、相手の思いを感じる心と同じくらい、言葉で伝え合うことも大切になるのだと思います。私は相手に何か伝えたい時、どう伝えたいのでしょうか。そして、それは相手に私の思いが、私の思いのまま伝わっているのでしょうか。伝える相手にどこまで、どれだけ伝えたら相手に伝わるのでしょうか……。

言葉、身体、表情など伝える方法はたくさん

あつても、出会ったばかりの人、思いがすれ違っている人などとはやはり言葉が大切な伝える手段であることと、相手の思いを聞く手段にもなるのだと思います。相手にどうしても何かを伝えたいと思う、しかしその相手とは考え方が違う。どうしても相手との間で分かり合えない時、私たちは相手が何を思っているかを考えます。伝えたいと思った時に相手の思いを考えたりするのは、伝える側も相手には、分かってくれたいという思いがあるのだと思います。

何かを言葉で伝えようとしたときも、言葉だけが必要なのではなく、相手を感じる心は必要になってくる気がします。その分相手の思いを感じる心は鈍らせてはいけないし、人の思いを感じる心を常に持ち続けることは伝える前に持っていました。自分の思いを伝えるにも重要なものだと思います。

子どもが保健室に入ってきます。

入ってくる時の表情、ときには入ってくると同時にある言葉、ときにはのぞくだけで、入って来られない。これらを見逃さないようにしたいと思つていきます。この時の表情、動き、言葉、子どもが私に伝えてくるもの一つだと思つたのです。

最初入ってきた時の子どもから伝わってくる私が感じた思いを、私は大切にしたいと思つています。最初の表情から伝わってくる子どもの気持ちは、私が思うより複雑だったり、検討はずれだったり、当たっていたりです。そして、入り口から私の所までやって来る動きで全体を見ます。子どもが、どこを痛いと感じ、どこに気持ちを置いてあるかを感じるので。

私が保健室の仕事として大切にしていることの一つです。これはもしかしたら言葉のまだ少ない幼稚園より、言葉を使えるようになり、いろんな

言葉で表現できるようになった子どもたちのいる
保健室で必要なこともあるのだと思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

こころとあたまの人間学から

吉増 克實

わたしたちは、リズム的に拍動しながら永遠の
更新を繰り返すいのちの宇宙の一部です。ひとつ
として同じものない一つ一つの個性的なこころ
は世界に織り成されて無意識のうちに宇宙の万象
と交流し響きあっています。人間は目覚めたこ
ろを通じてその作用を受け止める共感の中心とな

り、同時に動かされる肉体を通じてその心を表現
する中心となるのです。こころはもともと共感と
表現を通じておのずから伝わるもの。でも、もし
わたしたち現代人がそう感じられないとしたなら
なぜなのでしょうか。

わたしはいま、「心の医療科」という診療科の

なまえで、心にさまざまな悩みや障害をかかえて苦しんでいる方たちの診療を行っています。ふつう使われる精神科や神経科ではなく、そんな聞きなれないなまえを使うのには理由があります。精神科というなまえは障害が「あたま」に、つまり知能の働きにあるという考えとつながっていますし、神経科という名前は障害が「からだ」につきまわり脳や神経にあるという考えとつながっています。しかし、人一倍鋭い思考力をもった人でも、また脳波や頭部のCT検査に異常がなくても、「こころ」が孤独や空虚感に苦しむことはあります。こころはあたまとは別に考えなければならぬものなのです。生き生きしている人というのはいまが生き生きはたらいっている人であつて、ただあたまの回転がいい人ではありません。こころのはたらきこそ私たちのいのちを支えているはたらきなのです。「こころ」と「あたま」の区別にはきわめて重要な意味があります。心の医療科で

なければならぬと思うのはそんな理由です。それでもそんな区別について疑問に思う方も多いかもしれません。じつは、私たちは日常的に用いる広い意味の心のはたらきを表す言葉の中で、正確にこころとあたまとを区別して使っています。たとえば温かく包むこころとは言いますが、温かく包むあたまとは言いません。冷静で鋭く切れるあたまとは言いますが冷静で鋭く切れるこころとは言いません。それは広い意味での心の働きに二つのあい対立するはたらきが備わっていることを示してくれています。わたしたちが義理と人情の板ばさみになったり、理性と感情との間で悩むのはそのためなのです。

このような区別
はもちろん日本語
に限ったことでは
ありません。それ
は古い時代から洋



の東西を問わず行われてきました。たとえば古代ギリシアの哲学者はヌース（精神・あたま）、プシケ（心情・こころ）、ソーマ（肉体・からだ）を区別しています。思（おも）う」という漢字があります。心の働きを表すこの漢字は二つの部分からなっていますが、下の心の部分は心臓の象形文字、上の田の部分は脳（あるいはあたまの象形文字）です。広い意味の心の働きがこころとあたまのはたらきからなることを心臓と脳を組み合わせることであらわしているのです。ちなみに、この字では脳が心臓に支えられています。脳が心臓の支えを失うと（心臓の横に転がり落ちて）悩（なやむ）という字になります。また日本語のこころは心臓が拍動する音を表していて、「こころ」のはたらきと心臓とのつながりを、あたまはひよめき（頭頂部の大泉門）をあらわし、「あたま」のはたらきと頭や脳とのつながりを示しています。

こころとあたまとの対立は人類史にその根をた

どることができません。人間はこころが目覚めることによって、人間以外の生物の心が食と性の生命的必要にしばられているのに対して、それとは直接の関係をもたないあらゆる世界の現象にこころが動きからだが動くようになりました。それが人類史における宗教と芸術の始まりです。自分に絶えず働きかけてくる圧倒的な魔術的現実に翻弄されるうちに、人間は世界と自分との間との直接的なつながりを絶ち意識し思考することができるようになりました。その結果、いわば夢見つつおのずからできていたことが自分が作り出した目的に向かつて努力しなければならなくなつたのです。楽園からの追放とは人間の心の中に虚無が目覚めることを意味しました。人間の人格の内部で生命と、虚無によって変質した生命作用の中心としての自我とが対立的にはたらいっています。生命と自我との対立をさかのぼると、人間のいのちを含めた一切の生命世界と人間に宿った虚無との対立を

表しているのです。

こころのはたらかはいのちの世界があるがままに受け入れそれと同化しようとするはたらかです。こころは世界と他者への受容共感と愛と献身として現れます。こころにとつては、一人一人がみんな違うこと（違ってはいるが似ていること）、違ったものがつながりあっていること、時の中で絶え間なく移り変わること（リズム的に更新され、似ているけれど違ったものとしてあらわれること）がうれしいのです。また無条件に好きなものの大事なものを持っている。好きなものが楽しめる、人と一緒に楽しめる、人が楽しくしていることがうれしいのです。こころを動かすからだを動かす生きていることがうれしいのです。こころが動くという意味では悲しみもまた生きる力でもあるのです。こころの目覚めと成長とともに共感する世界が広がりが深まります。こころの成長を促すものは自分とは異質なものに対する共感

身欲求です。

あたまのはたらかは自分とは異質ないのちの世界を自分が支配可能なものにしようとする働きです。あたまは変化を憎み時間を憎みます。あたまにとつて変化しないものこそ価値あるものなのです。頭がいいというのは時間をかけずに簡単に（手間もひまもかけずに、こころからでも動かさずに、楽をして）目的を達成することです。文明はそのようにして生まれました。文明の発達によるこころの疎外は、こころとあたまの対立に根ざします。あたまによる自己主張、エゴイズムと形式主義（マニユアル万能主義）とは世界と他者への攻撃と要求として現れ、他者や世界との共感のつながりを不可能にするのです。

こころを見失ったあたまのはたらかはいのちの破壊へと向かいはじめます。破壊それ自体を快と感ずること、壊してすっきりすると思うことはすでにそのことの兆候です。時の中でこころとから

だを動かしてすごすこと、心を通わす喜びを育て、広げ、深めることが大切です。そして、ころが指し示す方向をしっかりと受け止めていれ

ば、あたまの働きも、こころといのちの働きを守り強めることもできるのです。

(東京女子医科大学第二病院)

存在^{ある}ことの嬉しさを伝える

—言葉の世界から—

佐塚 公代

私は二十年近く、地域の子ども達やお母さんやお年寄り達と、絵本を読んだり昔話を語ったりし

て過ごしています。それは息子達との言葉のかけあいから始まりました。長男は三か月位から「ウ

グリーン」とか「ウディア」とか大きな声を出して叫びました。五か月目になると「マンマ、マンマ」とハッキリ言うようになりました。その度に私は「そよよママよ」と声をかけて喜びました。

赤ちゃんが訳の分からない声を発した時に、そばに居る大人が意味付けをして返します。それも自然に喜びを持って応じます。六か月になると「ウツクンウツクン」と、鼻と喉を使って話し掛けて来るようになりました。話をしたがっているのが良く分かります。そこで「お話し上手ね、ウツクンウツクン」と応えると、また「ウツクンウツクン」と繰り返します。まるでコダマのように親子の声と呼応しあい、そして気分の良い時には「タラッタラッタラッ」とリズムをつけて唄のように繰り返し返します。この時期には親への愛情も強くなり表情も豊かになるにつけ、周りの大人の言葉かけが子どもの成長に大変な影響を与えるのだと実感する日々でした。

そんな子育ての中で、たくさんのわらべ唄に出会いました。次の「にんどころ」もそうした中の一つです。

ここは とうちゃん にんどころ
 ここは かあちゃん にんどころ
 ここは じいちゃん にんどころ
 ここは ばあちゃん にんどころ
 ここは ねえちゃん にんどころ
 だいどう だいどう
 コチヨ コチヨ コチヨ

「にんどころ」とは「似ているところ」と言う意味であり、それは子どもの顔をタオルなどで拭いてあげる時の可愛がり唄です。「ここは



父さんに似ているね」と唄いながら頬を拭いてあげる。「ここは母さん似だね」「ここは爺さん似だね」……と次々と拭いて行き、「だいどう、だいどう」と顔全体を拭きます。「だいどう」とは「一家一門が繁栄している」と言う意味です。そしておしまいに「コチヨコチヨ」と、子どもの腋の下を擦り笑わせる。このわらべ唄には、繰り返しの言葉の何とも言えない、温かさと充実感があり、心が満たされます。家族の皆に何処かが似ていて、愛されながら今ここに居るのは、永い命の継なのです。

こうした内容の唄を口伝えしながら親子の日常が進められたら、どんなに幸せでしょう。生活の中でこんな育児の唄を伝えて来た昔の人の智慧と感性には、まさに驚くべきものがあります。顔を拭くと言う実用的で、子どもにとって時には苦痛な時間が、地方特有の語調とリズムを伴って唄うことで、聞く耳を楽しく訓練しユーモアも教え

て、人間として生きて行く上で大切な事を伝えます。その時に幼い子ども達は、この内容を理解していませんが、それでも良いのです。そうした雰囲気・空気の中で育てる事が必要なのです。子どもの文化は、肌の触れ合いや遊びを通して伝えられて来た、人々の智慧です。こうした昔から伝えられて来た智慧が借りれず、子育ては益々難しくなっています。幼い子ども達と、どのように生活し可愛がって良いのか、わからないお母さんも多いのです。一人きりで幼い子どもと向かい合い、不安な日々を送っている若いお母さんがたくさん居る中で、わらべ唄が非常に減ってしまっているのは、人間にとって何と言う損失でしょうか。

しかし現在も、言葉を声として蘇らせて子ども達に素直に受け入れられている詩人が居ます。その代表的な一人が谷川俊太郎さんです。福音館書店発行の絵本『めのまどあけろ』は、長新太さんの絵を伴った現代版わらべ唄です。そこには朝起

きてから夜寝るまでの、幼い子ども達の一日の生活が楽しい詩で綴られて、わらべ唄を知らないお母さんも、自分流の節で自然に唄ってしまいうようなりズムがあります。たとえば「にんどころ」と同じ顔拭き唄の部分は、こんな調子です。

ほったのはらに あめがふる

おでこのかおに あめがふる

はなのやまにも あめがふる

めとめのいけにも あめがふる

たおるでふいたら あおぞらみえた

声を出して絵本を読んだり唄ったりすると、自分自身が明るくなり子育ても楽しくなります。心地よい言葉は、それを語る者と聞く者の心を温め育みます。

また詩や童謡による語り部として、まじみちおさんも子ども達やお母さんに長く親しまれていま

す。至光社出版の絵本『いっぱいやさいさん』は、生きとし生けるものが愛されて存在しているのだと伝えてます。

きゅうりさんは

きゅうりさんなのが うれしいのね

すずしそうな みどりの ふくに

きらきら びーずを いっぱいつけて

次のページには玉ねぎさんに「玉ねぎさんは玉ねぎさんなのが うれしいのね」と語りかけます。

こうして次々に野菜達を登場させて、それぞれに「あなたは あなたなのがうれしいのね」と繰り返し

返します。この絵

本を読み聞かせす

る時、子ども達や

お母さんの表情が

徐々に嬉しそうに



なつて来るので、読んでいる私まで幸せになり、おしまいには聞いている子どもの名前を借りて「くちゃんも くちゃんなのが うれしいのね」とつい語りかけます。そうすると幼い子ども達は「ウン」と頷いてくれ、いつ迄もこうして素直に頷いて欲しいと願うのです。ただただ「うれしいのね」と言っているだけなのに、子どもの心をこんなにも満たしていただけるのです。

本当に心が素直になる一つの言葉に出会えれば良いのですから、多くの言葉は必要としません。それは宮沢賢治が『注文の多い料理店』の序文で述べている、「すきとおったほんとうのたべもの」となる言葉や物語との出会いなのです。母親が子どもの為^に心を込めて、語りかけ・絵本を読み・お話をするならば、きつと子どもは「すきとおったほんとうのたべもの」となる言葉や物語に出会って、母の声と一緒にその言葉や物語を、人として生きる上で欠かせない栄養として、心の奥深

くに蓄えるでしょう。家庭や地域で絵本を読み昔話を語りその場の空気が一つに融けあう時に、子ども達からピカピカの笑顔が送られ、お年寄りから昔の思い出話を贈られて、人は言葉を使い立場と時間を越えて共に存在^{ある}と確信でき満ち足りた気持となれるのです。

(けやき文庫主宰)



幼稚園誕生の時代

—— 関信三の葛藤 ——

国吉 栄

(十二) 関信三の長い旅

日本の幼稚園の始まりを考えるためには、関信三の生涯について一度十分に考えておく必要があるのではないかと私は久しく考えていた。というのも、関信三は当時ほとんど唯一の幼稚園案内人だったのであり、人々は、彼が書いた文章を通してのみ、幼稚園と

いうものを理解したからである。ということとは、彼は、今日の私たちにとっても、当時の幼稚園について何事かを知ろうと思えば、避けて通ることのできないキー・パーソンなのである。

関信三が謀者であったという事実についても、それ

をまったく意に介さないか、あるいは彼の個人的経験の範疇でのみとらえることは、彼の人間像と描かれる幼稚園の始まり像とをゆがませはしないだろうか。彼は職業として課者だったのではなく、生き方として課者の道を選んだのである。キリスト教課者であった彼が、キリスト教思想の産物ともいえる幼稚園の紹介者であったことは、日本の幼稚園にとつてどのような意味をもっていたのか。関信三の幼稚園での働きは、彼の生涯の最後の四年ほどにすぎない。幼稚園における彼の働きを理解するためには、彼が生きた時代と、幼稚園に至る彼の生涯とを見なければならぬのではないか。こんな思いを抱いて私の関信三研究は出発した。

関信三と日本の幼稚園

関信三が日本の幼稚園の造形に深く関わっていたことについては、これまで幼稚園史の研究において論じ

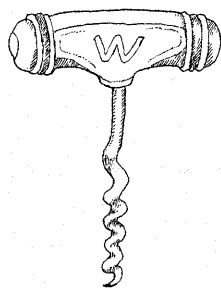
られたことはない。ただ「初代園長」という立場と、初期の文献の翻訳者あるいは著者として、保育史上の位置を付与されてきたのが現実である。しかし、関信三というひとりの人間の個人的経験が、幼稚園の歴史におどろくほど深くさびを打っていた。関信三はただ「初代園長」の職にあつたのではなく、「園長」という職務を開墾し、「園長」という職務を生きた。ただ本を著したばかりでなく、それによって日本の幼稚園を造ろうとし、また造っていったのである。

現如から「放逐書」を渡され、給付を断たれ、隠遁するようになつた英国から、ほとんど無一物で、しかし自由の身になつて帰国した関信三が、帰国第一作である『古今萬国英婦列伝』に「唯国家人民ノ富強幸福ハ教法ヲ尊信シ人民ノ自由ヲ保存スルニ在ルコトヲ信」ず、と書いていることは、私の心を強くとらえた。この根底には、信仰の自由を禁止・抑圧することによって体制の維持を図つた国家と、その一翼をに

なつた自分自身に対する、徹底した凝視があつたとみなければならぬ。キリスト教禁止の高札こそ降ろされてはいたが、依然として信教の自由が認められていなかった時代に、この透徹した洞祭に至らしめた彼の生涯を抜きにして、関信三の幼稚園を考へることはできない。関信三が幼稚園に出会ふのはこの作品の完成直後のことである。彼はフレイベルの幼稚園を、人類の自由と自治の基礎を造る場ととらえた。これが、彼をして幼稚園の事業に残りの全生涯を賭けさせた最大の理由であつた。彼は、自国の運命にのみ関心を抱くのではなく、「未完成」の幼稚園を完成させることを通して、世界に貢献し、人類の幸福に寄与するという、己の進むべき道を確信したのである。

関信三の幼稚園が、のちに恩物主義と批判されるような狭義の遊びではなく、ひろく遊びの意義を重視していたことは特筆されるべきであろう。大阪から派遣された保姆見習のひとり氏原銀は。「屋外保育盛ニシ

テ雨天ノ外ハ保育時間ノ大部ヲ保育シ子供本位自然ニ親シメヨト教ヘラレ」たと回想している。また保姆練習科の生徒のひとりに、次のような回想がある。幼稚園に通つていたのは当時の有力者の子どもたちが大半であつたが、ある日園児のひとりがけがをした。「大した事では無くて、一寸膝をすりむいた位であつたのに、執事が大層おこつて来て、若様にお怪我をおさせして、とんでも無い事だとまんまるな眼をして怒つたそう、関先生は一體お體のお弱かつた方ですが、丁度その頃先生はお宅に休んでいらつしやつたのですが、あんまり執事がおこつて来たので、御自分で邸に出かけていらつしやつて、いろいろとお話をなされた、そして、幼稚園に来てお友達と遊んで、少し位はすりむく方がいい、それで無ければ幼稚園にいらつしやつた



効が無いと云つて、約一時間ばかりも幼稚園のお話をなされたので、やつと話がわかつたということを開先生から伺いました」(櫻川以智談『日本幼稚園史』131頁)。

この逸話は大変興味深い。保姆練習科を卒業して何十年もたつてのことである。おそらく倉橋惣三に当時の思い出を聞かれたのであろう。彼女が當時を思い起こして真つ先に心に浮かんだのが、関信三の言葉であつた。関信三は、「幼稚園に来てお友達と遊んで、少し位はすりむく方がいい、それで無ければ幼稚園にいらつしやつた効が無い」と、けがをさせたと苦情を言う相手に言い、またそのエピソードを練習生たちに語つたという。苦情を言つた相手にこんこんと幼稚園の「効」を説いたことを練習生たちに話しながら、彼は幼稚園において何が一番大切であるかを彼女たちに話して聞かせたであろう。自分では保育論や恩物論を講じなかつた関信三が練習生たちに説いたのは、なに

よりも幼稚園とは子どもの共同体であるということであつた。幼稚園は子どもたちが友達と遊ぶところであり、すりむいたり、けんかをしたりという子どもたちの自由な遊びの中に、自由と自治の幼稚園の意義を認めていたのであろう。関信三の幼稚園の子どもたちは恩物を中心とする室内保育ではなく、むしろ「幼な子の園」Kinder - Gartenを駆け巡つていたのである。

これを裏付けるように、彼は『幼稚園創立法』において、園庭の意義をきわめて高く評価している。彼は保姆の控え室もトイレもない質素な園舎に、広大な園庭を備えることを要求した。フレールベルが幼稚園の最も基本的な設備と考えた園庭を、関信三も「至要物」と考えたのである。フレールベルがそうであつたように、関信三も自国の運命と生きる道について深く考えていた。この点において、関信三にはフレールベルと共通するものがあつたといえよう。またその観点から、彼はフレールベルが発見した遊びの意義を認めることが

できたのではないだろうか。

彼の墓碑は、たとえ著作においてフレールベルの理論の全体が紹介されていなかったとしても、彼が考えていたのはまさしく「フレールベルの幼稚園」であったこと、そしてフレールベルについて語るとき、彼が常に敬愛の言葉をもってしていたことを私たちに教えてくれる。教え子たちは深い共感をもって関が語る言葉を受け止め、フレールベルの墓と同じ形、フレールベルの恩物に模した形の碑を作らせたのである。

それからの幼稚園

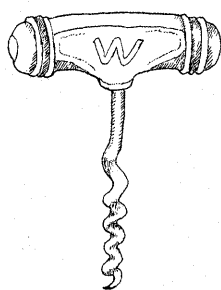
幼稚園の始まりには、ごく初期にひとつの大きな断絶がある。それは、関信三の死と共に始まった。

明治十二年十一月、関信三死去。十三年二月、松野クララ、正規の職員を辞し、囑託となる。三月、田中不二麿、文部大輔を事実上解任され、司法卿に転出する。五月、中村正直、東京女子師範学校摂理を辞す。

七月、幼稚園附属保姆練習科、校則改正により廃止される。同月、豊田美雄、鹿児島から帰京後幼稚園保姆を辞し、本校専属となる。十四年十月、もうひとりの最初からの日本人保姆近藤濱、辞職。「そして、誰もいなくなつた」。

関信三の死に始まって、幼稚園の誕生に立ち会った人々はすべて去っていった。ひとつの時代が確実に終わったのである。しかし、ひとつの時代が終わつたのは、幼稚園ばかりではない。明治維新という幼稚園を生み出した時代も関信三の死の前に、すでにひとつの時代が終わっていたのではないだろうか。十年五月、木戸孝允没。九月、西郷隆盛、自刃。十一年五月、大久保利通暗殺。天皇を政治の表舞台に引き出した明治維新の大立物は皆いなくなつた。

大久保の死後、宮中



ではにわかには危機感が高まったという。明治天皇が教育に深い関心を抱いていたことはよく知られているが、「少しく注意してみると、天皇が、為政者や教育担当者に直接、具体的な意見や指示を表明されるようになったのは、大久保の死後のことなのである。斬姦状を伝えられた侍補達が天皇御親政を諫言してから以降、このような現象が現われている」（土屋忠雄『明治前期教育政策史の研究』294頁）。教育界に大きな変化が訪れようとしていた。その最初のはっきりした兆候が、明治十二年九月、内務卿伊藤博文に与えられた、当時文部卿の地位にあった寺島宗則に示された「教学大旨」であり、究極の形が、明治二十三年十月に下され、太平洋戦争に敗れるまで教育の基本方針とされた「教育勅語」であった。

明治十三年二月二十八日、寺島宗則は文部卿の職を解かれ、直後に田中不二麿は司法卿に転出させられた。田中不二麿の転出に続いて中村正直も転出した。

田中、中村の転出は、大久保暗殺以後の政治の展開と無関係ではない。幼稚園は、当初の支持母体を失った、と見ることができよう。

十三年五月、中村正直に代わって東京女子師範学校摂理に任じられたのは、津和野藩出身の国学者、福羽美静であった。かつて耶蘇宗徒御処置取調掛として、浦上キリシタンの流配問題に関わっている。明治五年三月、神祇省が廃止されて教部省になった時の初代教部大輔である。信仰統制を司どる教部大輔であった福羽美静が、中村正直の跡を襲い、東京女子師範学校の摂理となった。文部省の新方針を示すにあたって、これ以上象徴的な人事はあるまい。これは信教の自由こそ国家人民の富強幸福の基本であると感受していた関信三とは対極にある思想であった。

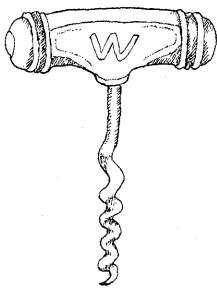
関信三以降、日本の幼稚園がどのような変化あるいは成長をとげたかについては、改めて検討されるべき課題であろう。関信三の死後幼稚園を襲った変化は、個

人の意志を越えたところのものであり、また、幼稚園という一教育施設だけに現われたものではない。しかしなお、幼稚園の変化は、政情の変化のみによるのではなく、関信三というひとりの人間の死と無関係ではなかったことも指摘しておかなければならないと思う。

関信三が生きていたら、おそらくこの時、彼の首が切られることはなかったであろう。関信三は経歴としては福羽美静側の人間であり、皇国としての国家の方針に従い、またその実現のために働いた先兵であった。田中不二麿や中村正直のような、いわゆる洋学派として時代の表で働いた人間ではない。彼の変化は内なるものであり、声高に信仰の自由を叫んではいなかった。また、体験を通して、権力というものの力とその恣意性を知っていた。彼には、政情の変化のものであっても、幼稚園を人類の自由と自治の基礎を育むものとして育てうる思慮があったのではないか。内に

秘めた確かな思いをもって、彼は幼稚園の内部において肅々と自由と自治の教育を進めることができたかもしれない。

幼稚園の規模についても、おそらく彼は強く助言したであろう。彼は最初の幼稚園の規模を後悔していた。間違いだつたとさえ思っていた。だから新しく開かれる幼稚園は規模を小さくすべきであると考えていた。事実、彼が実質的に創設に関わった大阪と鹿児島の幼稚園は、ともに小さな規模で始められている。けれども、彼の死後、幼稚園は大型化の一途をたどる。小規模では採算の面でも問題があつたし、入園希望者も増えたとし、何といつても模範幼稚園として中央に建てられた国立幼稚園が定員一五〇人という大きな規模で厳然と存在していたからである。こうした幼稚園の規模



が、日本の幼稚園の質に及ぼした影響は測り知れない。

関信三の『幼稚園法二十遊嬉』は、幼稚園が普及するうえで大きな役割を果たしたとされる一方で、いわゆる「フレーベル主義」「恩物主義」と批判されるような保育を生み出したとも言われる。しかし、彼が死を予期して著した『幼稚園法二十遊嬉』がフレーベルの意義をおとしめ、ただ恩物を形式的に広めることに貢献したとするなら、それは彼の本意ではない。たしかに、関信三がなした翻訳や著作が、今日から見ても概して形式的な印象を与えることは否めない。翻訳に多くの瑕疵もあったし、思い込みによる失敗も少なくなかった。しかし彼はフレーベルの幼稚園を広めるために、きわめて限られた情報のなかで、手に入るあらゆる英訳本を駆使し、最後まで力をふりしぼった。フレーベル自身の著作の最初の英訳が出版されたのは、関信三が没した年である。A・L・ハウによってフ

レーベルの著作が日本に紹介されるまで、それから二十年以上のブランクがある。日本の幼稚園はフレーベルの幼稚園に倣おうとして出発しながら、関信三の死と政策の転換とによって、初期の重要な段階で直接フレーベルに学ぶ機会を失ったのである。関信三の早逝で日本の幼稚園が失ったものは大きい。

旅の終わりに

一昨年年初冬、私は思いきって長崎を訪ねた。長崎県立図書館の郷土資料室で調べものをする必要があったし、なによりも関信三がかつて歩いた地を歩いてみたかった。

長崎駅に荷物を預けて、寄り道しながら小高い丘の上の図書館に向かった。図書館が立っていたのは、かつての長崎奉行所の馬場の跡地だった。浦上村から狩り出されたキリシタンたちは、大雪の中、この庭に終日立たされて、各藩に送るために振り分けられた。猶

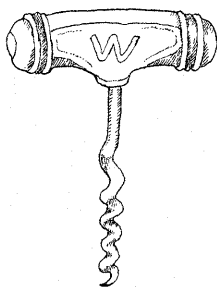
龍の仲間たちも捕縛に一役買つて報償された。郷土資料室のこじんまりした一室で、出していただいた当時の資料を繰りながら、どうも落ち着かない気分だった。「浦上異宗徒一件取扱」「異宗徒費計算書」などと言書かれた文書と、窓の下にあるはずの奉行所の庭が幾度となく頭の中で重なった。猶龍が、多くの犠牲者を出したこの時の大弾圧に加担するのをあやうく逃れたことは、彼にとつて幸いであつた。大阪への転任が遅れてこの時長崎在勤のままだったとしたら、彼はのちにひとり歩み出すことをせず、他の破邪僧たちと同じように宗門内にとどまっていたのではない。

翌朝、まだ早い時間に大浦の天主堂に出かけた。出会う人はまばらである。天主堂の前には思いがけない光景があつた。関信三がキリシタン探索の拠点にした妙行寺は、地図上では「天主堂の近く」という認識しか持てなかつたが、両者は実に隣あつていた。しかも、妙行寺の、天主堂の参道に面した敷地には、天主

堂を訪れる観光客目当ての食堂や土産物屋が店を構えていた。私は感無量で、天主堂前の広場にたたずんだ。

広場で天主堂の絵を描いていた人が話しかけてきた。私が「歴史に興味があつて」と言うと、その方も「ぼくもです」と言われた。高校で美術を教えていらしたという。「その道を歩いてごらんなさい。とてもいい道ですよ」。教えられて、天主堂の門のすぐ左手に細い道があることがわかつた。「行つてみます」。そのひっそりとした道に足を踏み入れると、私はすぐにここが「探索者たち」の道であつたことに気づいた。

道は天主堂をまくように山へと続いていた。坂道の反対側には妙行寺の墓地在が広がっている。僧侶がいて何の不思議もない絶好の場所。登るにつれ天主堂は側面から



徐々に角度を変えながら全容をさらしていく。こんなに見えてしまつていいのかと思うほど丸ごと見わたせる。集う人々の顔や声も手にとるようだったろう。しかもあちらからは山の木々に隠れてこちらの姿を見ることはできない。ひそんでいる猶龍の鼓動がドクドクと聞こえてくるようで、私も思わず息をひそめた。完全に天主堂の背後に立ち、一息ついて姿勢をただすと、天主堂の塔のむこうに青い海が見えた。

天主堂の裏山から幼稚園までの道は、なんと遠いことだろう。けれどもそれはたしかに彼が歩いた道であつた。天主堂の塔のむこうに青い海を見たとき、私は彼がただ息をひそめて他者の秘密を暴こうとする密告者ではなかつたことを改めて思った。彼は本山に護法場が開かれる以前から、僧侶たちの生活を糺し、改革を求め、同僚の白眼視にめげず禁忌のキリスト教を学ぶ派内の前衛であり異端であつた。幕府が崩壊して後ろ盾を失つた僧侶たちがうろたえている時に、彼は

破邪僧として長崎に出立した。宣教師に師事し、「邪教」の洗礼さえ受けた。さらには「邪教の巢窟」である異国の神学校に入学までして、なんとか仏教護持の道を開こうとしたのである。

当時の人々のキリスト教に対する態度は、一般に「怖れ」であつたといわれるが、関信三のキリスト教に対する関わり方は、僧侶も含め、同時代人のそれとはかけ離れていたといつてよい。忌避するのではなく知ろうとすることによつて、彼はキリスト教に対する理不尽な怖れから開放された。さらに、キリスト教を知ろうとすることは、それを人々から長く遠ざけてきた禁教政策と封建制度とに対峙することにもつながつた。さらには、自らの基盤であり、幕府の保守鎖国政策の産物でもあつた仏教の現状を直視することにもつながつたのである。彼の知ろうとする態度とそれによつて導かれる現状認識、改革への意欲は、彼が猶龍であつた頃から関信三に至るまで、彼の生涯に一貫す

る姿勢であった。幼稚園に出会ってから、彼は単に外国の施設を模倣しようとしたのではなかった。学び、取り入れ、改良しようとした。日本の幼稚園を創り出そうとしていた、と言ってもよい。

忘れられ、おおい隠され、自らも決して語ろうとしなかつた彼の生涯。仏教史、外交史、キリスト教史の裏側に密かに刻まれた異なる名前。彼のこうした特異な在り方は、彼が、それぞれの分野にとっても、また日本の歴史そのものにとっても、きわめて特別な時代を、きわめて意思的に生きたことの結果であったと今思う。彼はこの時代を、人知れず己の信ずるところに従い、己の生をあきらめずに生きた。そして最後にたどりついたのが幼稚園という仕事であった。彼はそこに自らの生涯の完成を信じたのである。

私は、彼が長い旅の最後に幼稚園に出会ったことを彼のために喜ぶ。そして、彼が最初の幼稚園の紹介者

であったことを、幼稚園のためにも喜びたいと思う。信教の自由、すなわち、個人を徹底的に尊重する思想を獲得した人間によって日本に幼稚園が紹介されたことは、時代を考えれば、奇跡に等しい。

そして私自身も、関信三とともに幼稚園の始まりの時代を歩くことができたことをうれしく思う。関信三の生涯をたどる旅は失われた彼の息をよみがえらす試みであったが、彼自身が、謎に満ちた保育史の迷宮を歩く私の手引き者となってくれた。

(終)

本連載は私の未公開の関信三研究を元に書きおろしたものです。発表の場を与えていただいたことを感謝申し上げます。

目をこらして (22)



朝、保育室のドアを開けると、ほのかな香りがする。

見回すと、棚の上のヒヤシンスが目に入った。

秋に子どもたちと栽培を始めた。

冬になり根が伸びて、葉の根本にはずいぶん前から硬い

緑のつぼみが見えてきていた。

でも、そのつぼみは、なかなか開かない。

硬いつぼみは、とても頑固そうに見えた。

いつ咲くか、いつ咲くかと毎日楽しみにしていた。

それが、今朝、花開いた。

子どもたちが登園する前の静かな保育室で、私は、じつ

とヒヤシンスの花を見つめていた。

つぼみの上の方の何輪だけが花を開いていた。薄いピ

ンク色の小さな小さな花だった。

昨日までは、緑のつぼみだったのに、今は薄いきれいな

ピンク色に染まって、「今咲いたよ」と言いたげに、花は

初々しくともうれしそうに見えた。

その花を眺めながら、突然、ピンクの色は一体どこから

来たのだらうという思いに包まれた。





耳をすまして

昨日までは緑に見えたその内側で、柔らかなピンク色が静かにしかし確実に準備されている。

そして、今、という時を選んで、こうして、花開く。

子どもたちがまだやってこない静かな保育室で、私は思っていた。子どもたちもヒヤシンスの花のようだ。そして子どもたちの中に蓄えられている、それぞれの柔らかな色のことを考えた。

子どもたちも、自分の時を選び、ゆっくりと自分色の花を咲かせている。それを私は、待つことができているだろうか、見ることができただろうか。

*

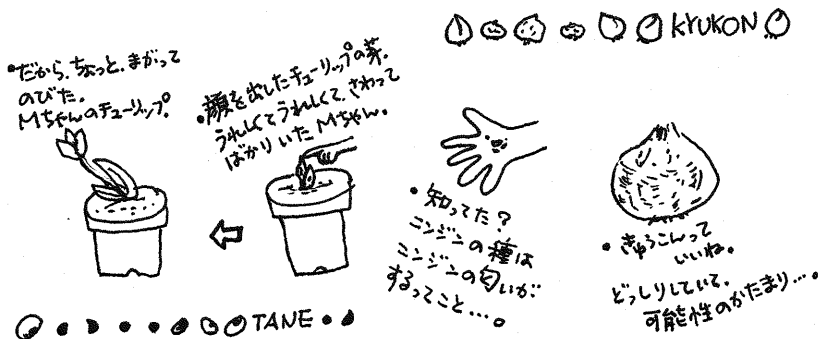
ダダダッと元気な足音がして子どもたちが、次々に駆け込んできた。

「おはよう!」「何見ているの?」

「あ、咲いたんだ」「いい匂いだねえ」「え、かがせてよ」ヒヤシンスの回りは、急ににぎやかになった。

今日一日が始まる。

絵と文 宮里暁美 (目黒区立ふどう幼稚園)



編集後記

朝日新聞の神奈川版に、昨秋から四部にわたって「がんと向き合つて——記者の体験から——」という記事が連載されました。先日、この連載が終わつたのを機に読者との交流会が開かれ、その様子が二回にわたつて朝刊に載っていました。

この記者が、「一人称で書く」ことになつたきっかけは、入院中の一読者としての体験だそうです。新聞を讀んで一番胸に響いたのが読者の投稿欄で、社会面の記事を読んでも「本当に難問にぶち当たつて苦労している人の肉声が伝わってこなくて感情移入でき」ず、記事を書いてきたものとして衝撃を受けたそうです。

そして「新聞には情報を提供するだけでなく、読者と双方向のやりとりをしながら共感したり考えたりする役割があるのではないか。そのため素材として自分の体験を一人称で書く意味があるだろう」と思うようになり、連載を決めたそうです。

その過程では、「文字で人に伝える」ということは、自分の中で体験をなぞり、整理する過程が必要」だったり、「体験していない人にどう伝えるか、悩み続け」たり、と葛藤があつたようです。

それでも、「この連載に励まされた」という多くの反響があり、その言葉にこの記者は励まされました。さらに、読者との交流会がもたれたことから、読者と双方向のやりとりが、すでに始まつていることがわかります。

(A)

幼児の教育

第一〇一卷 第二号

(二〇〇二年二月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十四年二月一日

編集兼発行人 田代和美

発行人 日本幼稚園協会

〒112-8600 東京都文京区大塚二二一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五二二一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一一四一九

〒〇三三三九五五五六一三(営業)

〒〇三三三九五五五六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

最新刊

20世紀は『児童の世紀』だったのか？ エレン・ケイの
100年前の名著を現代保育に活かす道を明らかにする

エレン・ケイ 保育への夢

『児童の世紀』へのお誘い

『児童の世紀』とは、エレン・ケイが新しい世紀のスタートを目の前にして、これからの時代こそ子どもたちにとって幸せな世の中にならなければ、という意気込みで執筆したことがよくわかる、見事なタイトルです。その願いにもかかわらず、20世紀は必ずしも子どもたちの世紀にはなりませんでした。

しかし、『児童の世紀』には、現代の保育や子育てへの素晴らしい示唆が、随所に散りばめられています。前著『倉橋惣三 保育へのロマン』に引き続き、荒井冽先生が今回はエレン・ケイの著作に取り組み、彼女の優れた思想・哲学を分かりやすく解説します。

激動の21世紀初頭に贈る、本当の意味での保育改革の道を明らかにする話題の本です。



(この本の内容)

- I 100年目に読む『児童の世紀』
わが道をゆく／自由な遊び／子どもと遊べる者／わたしの夢みる学校／いたずら／家庭生活の芸術家／二人の完全な幸福のもとで／根と花の相互関係／子どもの国よ そのままにてあれ／美しい糸を織り込む／自然の美や芸術の美／農家の小屋に点じた理想の光
- II 読書ノート『恋愛と結婚』
性道徳の発達過程／恋愛の進化／恋愛の自由／恋愛の選択／母となる権利／母性からの解放／社会における母性の役割／自由離婚
- 付 エレン・ケイをめぐる
「青踏」のこと、カール・ラーションのこと

荒井 冽 (白鷗大学女子短期大学部教授) 著

A5判 176頁 定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの
フレール館

『個と集団が育ち合う園生活』 (全5巻)

編著者 柴崎正行 (東京家政大学教授)
川合貞子 (東京家政大学助教授)
大豆生田啓友 (関東学院女子短期大学講師)

最新刊

- 第1巻 『0・1歳児クラス運営のすべて』
- 第2巻 『2歳児クラス運営のすべて』
- 第3巻 『3歳児クラス運営のすべて』
- 第4巻 『4歳児クラス運営のすべて』
- 第5巻 『5歳児クラス運営のすべて』



判型 B5判 各224~248ページ
定価: 本体各1,900円+税

●本書の構成と特徴

- ①生活する姿から
その月にあった子どもの生活する姿から様々なエピソードを提示。
- ②生活の見通しと保育者の願い
その月の生活や遊びの方向性をどう見通したかを〈読み取り〉〈願い〉〈援助〉の視点で具体的に書きあらわした。
- ③指導計画の作成と見直し
個と集団の育ち合いを生み出す実践事例と結びつけたその月の指導計画を示した。
- ④保育のアイデア
育ち合いを生み出すために知っていること、配慮することを具体的に示した。
- ⑤編者のコメント
以上の実践記録に対して、編者がどう読み取ったか、個と集団の育ち合いを生み出すためのポイントについてコメントした。

個と集団の育ち合いを生み出すための指導計画を求めている保育者のみなさんに贈ります。

一人ひとりの子どもを生かしながら、クラスもスムーズに運営したいという保育者の切実な願いに答えるための参考書です。

キンダーブックの
フレール館